F・スコット・フィッツジェラルド「威厳」試論――バルカンにおけるアメリカン・ガールの勝利

千代田夏夫

（2023 年 11 月 15 日　受理）

F. Scott Fitzgerald's "Majesty": The Triumph of the American Girl in the Balkans

CHIYODA, Natsuo

要約

F・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-1940）の第四短編集『起床ラッパで就寝』（*Taps at Reveille*, 1935）に収められた短編「威厳」（“Majesty,” 1929）は論じられることの極めて少ない作品である。あまりに単純かつ荒唐無稽な夢物語と片付けられがちな作品であるが、本稿では人種やジェンダー面からの批判、代表作『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）のパロディ的側面の分析を行いつつ、特に第一次世界大戦後のバルカン地域を新たな可能性の地平として設定した本作を、作家のロマンティックな傾向の真骨頂の表出として、再評価するものである。同短編集所収および同時期発表の他作品も併せて考察対象としながら、『グレート・ギャツビー』と余りに接着して語られてきたフィッツジェラルドにおける〈アメリカン・ドリーム〉とその達成の変容を検討したい。

キーワード：F・スコット・フィッツジェラルド、バルカン、アメリカン・ドリーム

※鹿児島大学 教育学部 准教授

はじめに

F・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald）の第四短編集『起床ラッパで就寝』（*Taps at Reveille*, 1935）に収められた「威厳」（“Majesty,” 1929）は論じられることの少ない作品である。題名についてはエミリー自身の威厳、この単語から直ちに想起される「陛下（Her Majesty）」という呼称、また1920年代30年代のアメリカ-ヨーロッパ間の大西洋航路を担ったホワイト・スターライン社の客船マジェスティック号のイメージなどが喚起されようが、本稿では「威厳」と訳す。

本作への批評には「ジャズエイジ・フラッパーへのフィッツジェラルドの戴冠」（Cowley 285）と素直に快哉を叫ぶマルカム・カウリー（Malcolm Cowley）の評をはじめ「エミリーの勝利の瞬間を最後に持ってきた」「フィッツジェラルドの成功作」を特徴づける「ナラティヴの流れとヴィジョンの統一性」（Prigozy 124-25）、マシュー・J・ブルッコリ（Matthew J. Bruccoli）の同作解説に見られる「人生のあらゆる可能性を味わいつくそうとする勇敢な若いアメリカ人女性」という「フィッツジェラルド気に入りの人物像」（*Short Stories* 464）が描かれた作品という見方などが確認できる。

それらを「誤読」であるとして本作を「嘲笑」を核に有する「作家がそれまでに著した作品同様の、痛烈な風刺」とみるアリス・ホール・ペトリー（Alice Hall Petry）は、「威厳」を「フラッパーの終焉についてのきわめてまじめな記録」（184）とする。本稿は、ペトリーの議論を適宜参照しつつ、それでも本作を、アメリカン・ガールによる、〈アメリカン・ドリーム〉達成の物語と読む試みである。

1. アメリカン・ガールによる、アメリカン・ドリームの達成

ヒロインのエミリーが実家の成功に伴って、「中くらいの家」「大きな家」「巨大な家」「豪邸」（67）へと移り住み、最終的には海外に居を移し浮名を流すさまが、作品冒頭に戯画的に示される。

新興富裕層の親が勝手を知らない「新しい世界（the new world）」たる上流階級の生活で、エミリーは「全てを独力で学び取らなくてはならなかった」（67）、一種のセルフメイド・ガールである。ただしそこにおいて金は標準装備で最初から備わっている。彼女が達成するのは、同じ『起床ラッパで就寝』の終わりにおかれた「バビロン再訪」（“Babylon Revisited,” 1931）で、主人公チャーリーが、放蕩を尽くした1920年代初頭のアメリカ人を「一種の王侯であった」（160）と回顧するように、いくら金持ちでも比喩に留まるアメリカ人の貴族性を、本物の貴族にしてしまうという〈アメリカン・ドリーム〉である。

『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）ではアメリカン・ドリームの終焉或いは破たんが描かれるとよく言われるが、そもそもアメリカン・ドリームの達成とは、誰もに保証された機会の平等のもとに発揮された勤勉、決意、進取の精神の結果入手できる、まずは物質的な成功ではなかったか。アメリカン・ドリームそのものが、恋愛の成就といった内面の充実すらも求めるものに変質して、古典的な物質的充足の夢を精神的充足の足掛かりにしようとしたギャツビーの失敗は、

アメリカン・ドリームの変質と表裏一体をなしていた。

比して 1920 年代末から 30 年代初頭のフィッツジェラルド短編では、ブルッコリが論じるように人生の可能性を追求し、ハッピーエンディングの内に実際にそれをかなえる女性像が出現する。「威厳」のエミリーを筆頭に、1931 年の「ホテル育ち」（“The Hotel Child”）の十八歳のヒロイン、富豪のユダヤ系アメリカ人フィフィもそうであるし、大暴落直前の 1929 年 10 月 19 日に世に出た「泳ぐ人たち」（“The Swimmers”）で主人公ヘンリー・マーストンの人生を前向きに変質させる名前の出されないアメリカ人の若い「女性（girl）」もその系譜にある。夜間彼女をホテルの部屋に監禁するスペイン人と、十九歳にして離婚したというエピソード（236）は、その前近代的イメージをもって、小説内で彼女が担う解放性を際立たせる。

2. 可能性の地としての大戦後バルカン

エミリーの出奔相手たる「小さなバルカン公国の支配者」（Petry 186）のペトロコベスコ、彼が王となるチェコ＝ハンザという架空の国を始め、この時期の作品には、バルカン諸国のモチーフが多い。1930 年の「異国旅行」（“One Trip Abroad”）では、ヨーロッパを漫遊する新婚のアメリカ人夫妻がパリで出会うのが「オーストリア宮廷の遺物」（279）ことチキ・サロライ伯爵である。「バルカン的国家」（290）になぞらえられる根無し草的人びとの集うスイスのホテルを舞台とする「ホテル育ち」でヒロインを「私の夢のアメリカン・ガール」（291）と呼ぶ、実像はコソ泥のボロウキ伯爵は、トランシルヴァニアの城に並ぶ先祖の肖像画群に彼女の肖像を加えようとするなど、明らかにドラキュラ伯爵のパロディとして描かれる。「バビロン再訪」で好景気の放蕩時代に、寒空のもと妻を締め出して死の遠因を作ってしまったチャーリーが「自分のことを知る人がいない」（158）新天地として新生活をはじめているのがプラハである。

ドイツ帝国、オーストリア＝ハンガリー帝国の解体を受けたポスト第一次世界大戦の状況においては、「ホテル育ち」でプライドの高い英国準男爵の未亡人が旧オーストリア＝ハンガリー帝国系の貴族と思われるボロウキ伯爵に言い放つ「唯一残された称号は英国のものだけ」（302）というセリフはリアリティを有するものであっただろう。と同時に、同作のホテルの支配人が考えるように、金があるかないかの二択のアメリカに比し、今日は散髪代に事欠くようでも縁戚が倒れて遺産が転がり込むということも起こるのがヨーロッパであり（298）、特に第一次世界大戦後廃位がつづくも「併合された公国の君主の位は維持された」（*Taps at Reveille* 387）バルカン地域は、アメリカにおいて大衆が一攫千金を目指した 19 世紀の西部フロンティア、庶民から英雄への変容可能性を提供した大戦の前線＝フロント・ラインにつづく、いわば第三の、人生の大逆転をもたらす可能性として措定可能な場所であったと考えられるのではないか。

3．西洋と非西洋の境界と人種科学的見地

ペトリーは『起床ラッパで就寝』を論じる中で、この時期のフィッツジェラルドの作中人物たちが、「過去の過ち」と向き合ったうえで「償い」を果たすにあたり、「過去に過ちを犯した土地から去ることが贖いの最終段階」であり、「フレッシュな世界（fresh world）」への「脱出（exile）」（187）の必要性が描かれていると指摘する。ここでのペトリーの議論はおもに「バビロン再訪」「風の中の家族」（“Family in the Wind,” 1932）を念頭に置いたものであり、「威厳」においてエミリーの「脱出」が、彼女自身の過去の乱行の悔い改めに基づくものであると解することは妥当性を欠くだろうが、エミリーに散々迷惑をかけられた従姉のオリーヴが、やりたい放題やり切って英国王夫妻とパレードする彼女の姿に、「一番ひどく腹を立てている時でもいつも私を感動させてしまう人だった」（86）と、あらためて一種の癒しの効果を得ている点には留意しておきたい。

ペトリーの議論に沿えば 1930 年代作品群の主人公らにとってフレッシュな〈新世界〉となるのは、上述のバルカン地域―主としてオスマン帝国に支配されていたヨーロッパ地域すなわちルーマニア、ブルガリア、ギリシャ、アルバニア、1991 年までのユーゴスラヴィア構成国のある領域―（マゾワー iii：村田奈々子による序より）であることに注意したい。エミリーが「もっと大きな何か」「これ、というもの」（69）と希求してやまなかったものを手中に収めたのは、「文化的にはヨーロッパとアジアの中間地域」（マゾワー 17）だったのである。

そして、そこは「西欧世界のどんな街角にもあるような」（80）という形容で如実に示される非西欧世界であり、「この世の果て」（81）の様相を呈する。この（広義の）バルカンというロケーションは、アイルランド作家ブラム・ストーカー（Bram Stoker）の小説『ドラキュラ』（*Dracula*, 1897）という、吸血鬼が東（トランシルヴァニア）から西（ロンドン／英国）へ向かって侵略してくる恐怖を描いた作品を想起させる。そこは吸血鬼という超現実的要素の発生源に相応しい〈異国／非西欧〉であると同時に、その感染症的侵略のリアリティを担保する、アングロサクソン白人との、主として外見におけるある程度の共通性―ぎりぎりのところで白人に見える―を供給しうる地点だったと言えよう。『ドラキュラ』冒頭、主要登場人物の一人ジョナサン・ハーカーはトランシルヴァニアのドラキュラ伯爵の城に向かう道中、ブダペストについて「西洋（the West）を去り東洋（the East）に入る」（9）とその印象を記す。エミリーを追うオリーヴ夫妻が追跡の拠点として車を借りるブダペストは、「ヨーロッパの文明がアジアの原始的世界へと変わる境界」（丹治 179）「バルカンと北東ヨーロッパを結ぶ商業の拠点」（ストーカー 398）であった。なお同一の都市ではあるが、『ドラキュラ』に描かれる第一次世界大戦前のブダペストはオーストリア＝ハンガリー帝国（1867-1918）という二重君主制のもとの一方の首都であり、「威厳」においては 1920 年に成立した、国王不在のまま摂政ホルティ・ミクローシュ（1868−1957）を元首としたハンガリー王国（1920-46）の首都である。

「豊かなブロンドの髪」「青く広がる眼」（67）というエミリーの金髪碧眼は、『グレート・ギャツビー』でも引喩されるロースロップ・ストダード（Lothrop Stoddard）等が唱えた 20 世紀初頭の

〈人種科学〉が白人内でも最上級に位づける形質をたたえている。「少しだけ背の高い」（67）女性たるエミリーが、「小男」（79, 80, 81, 86）と連呼される、「（アメリカへの移民が最初に降り立った）エリス島入島者と見えなくもない、感じの悪い南欧人」（81、カッコ内筆者）いわゆるカッコつきの〈劣等人種〉と結婚してしまうというアイロニーは、この国際ロマンスの舞台の、西洋と非西洋の境界性に鑑みたとき、明らかである。

そもそもアメリカン・ドリームという概念は、アメリカの国是ともいうべき民主主義あるいは共和主義と直結する〈機会の平等〉のもと勤勉に励み独創力を発揮して成功を得られるという理想であるから、〈王/女王になろう〉という時点で原理的な齟齬をきたしているとも言えようし、そこにまた作者のアイロニーを見ることも可能だろう。

4. バルカン人の寄生性とアメリカ人の寄生性

最終盤の英国王夫妻とのパレードの場面では「第一車列に君主たる双方の夫君」「第二車列の王妃王配」（86）という配置に、古典的なジェンダー規範における従属的位置に甘んじるエミリーを見ることもできよう。このような女性の従属性は、同じ『起床ラッパで就寝』所収の「あやまちにあやまちをしても」(“Two Wrongs,” 1930)でも「あたしはただの詰まらないパラサイト（just an old parasite）だわ」（42）という妻の言にも確認される。「威厳」において、王妃というアメリカでは獲得不可能な〈アメリカン・ドリーム〉をヨーロッパで、女性のみによって可能な、配偶者というかたちで手に入れたエミリーの姿に、男性の従属的位置に甘んじる〈パラサイト〉としての女性ジェンダーが重なるのではないか。このように見ると、「威厳」に痛烈な風刺性を見るペトリーの議論にも首肯できよう。

実際にこの時期の作品群によく現れるバルカン人は〈寄生者〉として登場することが多い。「威厳」のエミリーの結婚相手、ペトロコベスコは「ヨーロッパを数年放浪している国籍のはっきりしない」人物であり「アメリカ人に頼って」（79）生きているらしいと、まずその寄生性をもって描かれる。「異国旅行」では主人公夫婦の妻ニコルのモンテカルロでの浮気相手オスカーが「たかり屋（sponge）」「寄生虫（parasite）」（272）として記され、また「生来気前がよく、良識の範囲内であれば喜んで勘定を持つ」（279）二人はその格好の的となる。そして夫妻がパリで出会うのが先に見た、オーストリア宮廷の名残の栄華を振りまきながら「あちらこちらを放浪しては気安くたかる（sponge）」（279）チキ・サロライ伯爵である。彼はニコルの妊娠時、一人になった夫ネルソンに付き合って夫婦のアパートにまで越してきてしまうのである。そして豪華な船上パーティを企画して「チキが全員を招待した」（283）挙句、夫妻をホストに仕立て上げて勘定をまわし、姿をくらましてしまう。ヨーロッパでの数々の経験を通して寄生虫に取りつかれたかのごとく「健康を損なった」（284）夫妻は最終的にスイスにたどり着いて、数年来二人にとりついていたドッペルゲンガーをそれと認識するのである。

「ホテル育ち」でフィフィに結婚を言い寄るボロウキ伯爵も、勘定を三週間ためた挙句に、富裕のイギリス人貴族の名前を保証人として勝手に出して本人から苦言を呈される。大恐慌直前に世に出た「泳ぐ人たち」では、主人公ヘンリー・マーストンのフランス人の妻シュペットが 1920 年代の好景気にヨーロッパに大挙して押し寄せているアメリカ人海浜客を「ヨーロッパが百年このかた知らなかったパラサイト達」（228）と唾棄を込めて評する。〈寄生者／パラサイト〉という視座を他作品にも持ち込めば、より相互連関的な構図が見えてこよう。

5.『グレート・ギャツビー』のパロディとしての「威厳」

「威厳」には『グレート・ギャツビー』のセルフ・パロディとも解しうる面がある。本作は一人称の語りから始まる。この「私」はすぐに姿を消してそのまま二度と現れないが、冒頭「私の自負のひとつ」（67）として十八歳になったとき以来、人の栄華に関して見る目を誤ったことはないと述べる語り手の口ぶりは、『グレート・ギャツビー』の語り手ニックを彷彿とさせる。

エミリーとペトロコベスコの外見描写に見られる人種主義的アイロニーが、『グレート・ギャツビー』内のそれとも通じることはすでに確認した。『グレート・ギャツビー』では登場人物らの白人性を脅かす装置として機能した人種主義／人種科学は、「威厳」ではハッピーエンドを迎えた新婚のエミリー夫婦にもはや何の影も落とさない。

『グレート・ギャツビー』のラストでは、ギャツビーが信じた未来の可能性が 17 世紀オランダ水夫の目に映ったであろう「新世界のフレッシュな緑の乳房」（140）のイメージに重ねられるが、「威厳」においては、アメリカン・ガールが王妃となったバルカンこそが、「フレッシュな」（Petry 187）新世界となっている。そこではアメリカの富とは関係のない「マグネシウム鉱床」（85）が富を保証する。そして「どこの誰でもない」とギャツビーを嘲るトムの言葉と共鳴するような、「どこの王子でもない」（78）ペトロコベスコのその王位こそが、アメリカン・ガールのエミリーを王妃に変容させるのである。『グレート・ギャツビー』においては比喩でしかなかった「王の娘」（94）たるアメリカン・ガールは、「威厳」において「エミリーおばちゃまは女王さまになる前はお姫さまだったの？」と問う娘に「いいえ。彼女はアメリカン・ガールで、それから女王様になったのよ」（479-80）というオリーヴと娘のやり取りが如実に示すように、エミリーは王女の位を飛び越して、本物の王妃になったのである。

おわりに

批評されることの少ない「威厳」において、比較的緻密な議論を展開しているペトリーの研究に倣えば、風刺的要素を読み取ることは充分に可能である。しかしながら、それを踏まえた上で、本作の天真爛漫な荒唐無稽こそがフィッツジェラルドの真骨頂ではないかと本稿では結論したい[1]。た

だしそれはただのお伽話ではない。フィッツジェラルドの想像力―それを彼の血筋に鑑みて Irish Imagination とも呼びえよう―が融通無碍に発揮されたところに彼の鋭い歴史感覚が加わって、唯一無二の文学作品が生じているのである[2]。

＊本稿は 2022 年 7 月 5 日、関西学院大学国際学部髙村峰生教授ゼミにおいてゲスト講義（遠隔開催）として発表した原稿に加筆修正を行ったものである。髙村氏と受講生各位に感謝申し上げる。

注

[1] 『アドヴェンチャー』（*Adventure*）の編集者であったモラン・チュダリー（Moran Tudury）宛の 1924 年 4 月 11 日消印の書簡でフィッツジェラルドは、『美しく呪われた者たち』を「誤った道」「メンケンへの譲歩」であったとしながら、執筆中の『グレート・ギャツビー』の幻影要素に自信を示しつつ、「幻影（illusion）を創出することのほうが私の好みと才能にずっと向いている」（Bruccoli and Duggan 139）と述べている。

[2] フィッツジェラルドの歴史観については、内田、ペトリー、カウリーを参照。1920 年代末からのフィッツジェラルドについて「国家的というよりもいよいよ個人的なものになっていったフィッツジェラルドの歴史感覚は、過去よりも現在と未来をずっと強く焦点化していた」（187）というペトリーの議論と、「自己批判が時代批判と本質的に重なり合うところに、Fitzgerald の自己理解と歴史把握の特徴がある」と指摘しつつ 1930 年代のフィッツジェラルド作品の重要なテーマとして「再生への意志」を挙げる内田の議論（242-43）は、同軸に位置するものであろう。

参考文献

Bruccoli, Matthew, J., and Margaret M. Duggan, editors. *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*. Random House, 1980.

Cowley, Malcom. “Third Act and Epilogue.” *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Work*, edited by Alfred Kazin, 1951. Collier Books, 1964, pp. 147-54.

Fitzgerald, F. Scott. “Majesty.” 1929. *Taps at Reveille*, pp. 67-86.

---. “One Trip Abroad.” 1930. *Taps at Reveille*, pp. 263-87.

---. *The Great Gatsby*, edited by Matthew J. Bruccoli. 1925.Cambridge UP, 1991.

---. “The Hotel Child.” 1931. *Taps at Reveille*, pp. 288-309.

---. *Taps at Reveille*, edited by James L. W. West. 1935. Cambridge UP, 2014.

---. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: A New Collection*, edited and with a preface by Matthew J. Bruccoli, Scribner, 1989.

---. “The Swimmers.” 1929. *Taps at Reveille*, pp. 223-43.

---. “Two Wrongs.” 1930. *Taps at Reveille*, pp. 24-44.

Petry, Alice Hall. *Fitzgerald’s Craft of Short Fiction: The Collected Stories 1920-1935*. UMI Research P, 1989.

Prigozy, Ruth. “Fitzgerald’s Short Stories and the Depression: An Artistic Crisis.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*, edited by Jackson R. Bryer, U of Wisconsin P, 1982, pp. 111-26.

Stoker, Bram. *Dracula*. 1897. W・W・Norton & Company, 1997.

内田勉『学ぶこと、伝えることの難しさ―内田勉　自撰論文集―』英宝社、2021 年。

丹治愛『ドラキュラの世紀末　ヴィクトリア朝外国恐怖症（ゼノフォービア）の文化研究』東京大学出版会、1997 年。

ストーカー、ブラム『ドラキュラ　完訳詳注版』新妻昭彦・丹治愛訳・注釈、水声社、2000 年。

マゾワー、マーク『バルカン―「ヨーロッパの火薬庫」の歴史』井上廣美訳、中公新書、2017 年。